

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520268

研究課題名(和文) 二十世紀以降における希望の原理としてのユートピア言説と共同体の再創造 / 想像

研究課題名(英文) Utopian Discourse as Principle of Hope after the 20th Century and Re-Creation/Imagination of Community

研究代表者

川田 潤 (Kawata, Jun)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：70323186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀以降の時期のユートピア言説を、<希望の原理>という視座から再考察することで、従来、重要視されてこなかった(あるいは、存在しないとすら考えられてきた)この時期のユートピア言説とその意義を再発見した。その上で、この新たなユートピア言説を、急速なグローバリズムの進行などに伴い生じるあらたな状況の中で発生する現代の諸問題と対峙する多種多様な新たな可能性を想像/創造することができる言説として捉え直すことができた。

研究成果の概要(英文)：This study reexamined utopian discourse on and after the twentieth century from the perspective of "Principle of Hope" and rediscovered utopian discourse (which was often considered to be vanished away) and its significance in this period. This new utopian discourse was recaptured as a discourse re-creating and re-imagining various possibilities to face current problems caused by the rapid spread of globalization.

研究分野：英米文学

キーワード：ユートピア 希望の原理 ユートピア的衝動 絆 切断

## 1. 研究開始当初の背景

従来のユートピア思想 / 文学研究において、二十世紀以降はユートピアが死にいたる時期として捉えられてきた。十九世紀後半に社会主義の理念に基づくユートピアのテキストが大量に生み出されることで、ユートピアという文学ジャンルは「理想」とする社会システムの青写真に固定されたと見なされ、更に社会主義と同一視されることで、ユートピアは文学的想像力を駆り立てることが少なくなり、かつてのようなユートピア作品はあまり書かれず、ディストピアというジャンルのみが残存することになる。現在では、二十世紀の社会主義の行き詰まりなどに伴い、もはや、ディストピアすら語られることはなく、ましてやユートピアを語ることなど無意味であるとすら考えられがちである。

研究代表者は、これまで、十七世紀後半から十八世紀にかけての自然への人間の眼差しと知の体系の形成という観点からのユートピア思想の検討、更に、等閑視されてきた作品を検討し、狭義の諷刺文学としてのユートピア像の見直しを行い、そして、「移動」という視点も加えることにより、「長い十九世紀」のユートピア文学と現実のユートピア計画も考察の範囲とし、通時的にユートピア言説の誕生から死と再生の過程の研究を行ってきた。

本研究は、このような応募者のこれまでの通時的なユートピア思想の系譜の見直し作業の最終段階に位置づけられる。従来のユートピア言説研究で鍵としてきた、主体、知の体系、理性、想像力、移動などの視座をもとにし、新たに〈希望の原理〉という視点を加え、文学テキスト研究と同時に現代社会における共同体の意義と実際に生じるユートピア的空間（災害ユートピアなど）の意義についても検討することで、学際的な研究を目指したものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、以下の4つの観点から、二十世紀以降のユートピア言説における、共同体の想像 / 創造力と〈希望の原理〉の働きを明らかにすることを目的とした。

(1) ユートピア言説に関連するテキストの収集・整理・分析

(2) 二十世紀以降のユートピア言説に関する理論的基盤の見直し

(3) 前述の2点と、現在・現実の共同体に関する理論・実践とのすりあわせ

(4) 前述の3点の成果を基盤にして、ユートピアに関する理論、ジャンルの見直しを行い、現在ほとんどその重要性に触れられるこ

とがなくなってしまった二十世紀以降のユートピア言説の意義について、理論的かつ実践的な観点から検討を加え、その再生・再評価の可能性を明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究は以下のような方法で行った。

全体としての研究の方法は、二十世紀以降におけるユートピア言説を分析する際に、文学テキストとそれに留まらず、広範囲にまたがるテキストの一次資料の収集・整理、そして二次資料を用いたユートピアと関連する分野の理論（フェミニズム、リベラリズム、ナショナリズム、エコロジー、主体、グローバリズム）の見直し、更に、現実に存在した・する共同体に関する社会学、心理学の観点からの実践と理論の検討、これに加えて、外部への報告と意見交換に基づく研究の方向性の修正と総括、という流れである。

上記の方法を、具体的には以下5点のような手順で行った。

(1) 二十世紀以降のユートピアに関する一次資料の収集・整理

具体的には、二十世紀以降のユートピア文学のテキストを、旧来のユートピア文学と呼ばれるもの以外にまで範囲を広げて、可能な限り網羅的に収集した。その中から重要と思われるテキストとを精読して、いくつかの構成要素（テクノロジー、医療、生命、グローバリズム、ネオリベラリズム、断片性等）を抽出した。更に、これまで・現在、存在した・する共同体に注目し、共同体の記録、あるいは、災害時に生じるユートピアの共同体に関するリサーチもを行い、上記同様に、その重要な構成要素（共感、医療、自然、脱イデオロギー等）を抽出した。

(2) 二十世紀以降のユートピアに関する理論的整序

具体的には、二十世紀を主な対象としたユートピア思想（プロッホ、マンハイム、マルクーゼ、ジェームソン等）に関係する書籍を収集し、その理論的背景を整理、検討した。また、二十世紀以降を扱うための社会的な最新の理論研究書、とりわけ帝国主義とナショナリズム、リベラリズムについて書籍を収集し、理論的な検討を行った。更に、主体論（ジュディス・バトラー）、心理学理論と共同体に関する考え方（ジョナサン・ハイト）も考察に加えた。

(3) ユートピア言説の理論、テキスト読解

(1) (2) の成果に基づき、さらに本研究

のキーワードである〈希望の原理〉という観点からいくつかの具体的なテキストにおいて検討を行った。とりわけ、20世紀後半のSF、ファンタジーなどにおける〈希望の原理〉の作用（未だ現れていないものという観点から）について分析を行った。そして、上記の2点を踏まえ、テクノロジーの変化、医療・健康の重要性、主体概念の変化、言語に関する問題の前景化などの構成要素について検討を行った。

#### (4) ユートピア言説の学際性の再検討

(1)から(3)で得られた成果を踏まえ、20世紀以降における学際的なユートピア言説を比較検討することで、その方向性、重要なキー概念などについての整理を行った。とりわけ、宗教的ユートピア思想という一般的にこれまで否定的に扱われてきた（扱われている）ことが多かったものを、現在の世界情勢の中での重要性という観点から検討した。とりわけ、グローバル経済におけるイスラム思想のさまざまな表象についての検討を行った。また、さまざまな災害等の現場における協力ネットワークの可能性とその限界についての検討も、同じく〈希望の原理〉という観点から行った。

#### (5) 総括

以上の4点の作業をまとめて、全体の総括を行った。

### 4. 研究成果

本研究は、20世紀以降の時期のユートピア言説を、〈希望の原理〉という視座から考察することで、従来、重要視されてこなかった（あるいは、存在しないとすら考えられてきた）この時期のユートピア言説を再発見し、この言説を、グローバリズムの進行などに伴い生じる新たな状況の中で発生する現代の諸問題と対峙する多種多様な新たな可能性を想像／創造することができる言説として捉え直すことができたと考えている。成果は大きく以下の2点のようにまとめることができる。

(1) 通常、ユートピアの終焉と考えられる20世紀以降のユートピア言説の再検討を行うことで、この時代に言説形式、そして政治との関係性を大きく代えたユートピア言説が発生・存在していることを確認した。具体的には、例えば、政治性を前景化せず、その虚構性を強調した形でのSF、ファンタジーというジャンルで、現実の枠組の脱構築を目指す試みが数多く出されていることを確認した。また、現実の様々な災害や閉塞状況に対抗するための現実の（小規模・非継続的）共同体にも同様の志向が見られることを確認

しつつ、同時に、このような動きと対立するネオリベラリズム的な言説にも、さまざまな形で（時には非常に懐古的な形式の）ユートピア的志向が存在し、機能していることも確認した。

(2) 〈希望の原理〉という観点からユートピア言説を考察するとき、グローバリズムの言説にもさまざまなユートピア的衝動を読み取ることができることを確認するとともに、その衝動が、一見、多用に断片化しているために、そのつながりが見えにくい、実は細やかな網の目状の言説のネットワークを作り上げ、それがネオリベラリズム的言説の強化をもたらしていることも確認した。一方で、ネットワークからの離脱、その切断を志向する言説の台頭（哲学、政治などの分野）も確認し、それらが前者に対抗する言説の可能性を有し、文学テキストとも相互影響関係にあることを確認した。

以上、2点から成果から、20世紀以降のユートピア言説の存在確認とその変容を確認できた。現在、その包括的な成果をとりまとめている最中である。

上述した「3. 研究の方法」の項目毎にまとめた具体的な作業と、その成果は以下のようになる。

#### (1) 20世紀以降のユートピアに関する一次資料の収集・整理

20世紀以降のユートピア言説について網羅的に収集・分析した上で、旧来のユートピア文学と呼ばれるもの以外のSF、ファンタジーなどにユートピアの要素を確認した。とりわけ、この新たなユートピア的要素はテクノロジーに基づくユートピア（ディストピアではなく）、例えば、医療、治療、健康などの分野が特徴的に描かれていることを確認した。このような分析成果とともに、ネオリベラリズムの台頭、グローバリズムが進行する中で、それに対抗する形での共同体志向が想像／現実に登場することも確認した。具体的には、グローバリズムの網の目を切断する対抗的断片性（アナキズムではない形で）、ネオリベラリズムによる新たな集団性への対抗的断片性などの要素も確認し、これらの断片性が集合性へ至る可能性も示唆されていることを確認した。

#### (2) 20世紀以降のユートピアに関する理論的整序

とりわけ、ブロッホ（そして、マルクーゼ等）を踏まえたジェイムソンのユートピアに関する理論を検討した。それにより、多種多様な文化的事象に発見可能な〈ユートピア的衝動〉と、テキストとしてのユートピアの

相互依存関係を明らかにし、従来の狭義のユートピア思想研究の限界(と、それに伴うユートピアの死という言説の捏造)について理論的に整理した。また、パトラーのジェンダー論的主体の理論がユートピアのテキストに与える可能性について考察を進めた。さらに、ハイト等の社会科学的・心理学な分析を踏まえた理論が、一方で現状肯定的なイデオロギーを助長する可能性をもちながらも、ユートピア思想が検討すべき課題を提示していることも明らかにした。更に、以上のような結果を踏まえ、グローバリズムとネオリベラリズムの進行への対抗理論の模索が進められる一方、旧来の左翼的思考の衰退と保守的思考の台頭を追認する理論を、再度逆転する理論的可能性についても確認した。

### (3) ユートピア言説の理論、テキスト読解

<希望の原理>という観点および、(1)(2)の成果を基にして、現代の、例えば、チャイナ・ミエヴィルなど新世代のSF、ファンタジー作家のテキストにおける資本、国境、主体、知覚などの要素の検討を行った。そして、これらの現代小説は、旧来のSFの枠組みを継承した上で、新たな他者との共存(不)可能性の言説(の萌芽)が描き出していることを確認するとともに、これらのテキストにおいて、テクノロジーの可能性/不可能性をめぐったユートピア/ディストピア言説の衝突が起きていることも確認した。このようなテクノロジーとユートピア的衝動の関係以外にも、ユートピア的衝動がさまざまな形で変容し、グローバル商業資本のネットワークへの編入/そこからの切断・断線の可能性を描いていることも明らかにした。

### (4) ユートピア言説の学際性の再検討を、文学以外の(ユートピア的衝動をもつ)テキストを分析

具体的には、災害ユートピアという観点から、自然災害、原子力災害などにおいて、一時的な共同体が形成された状況に関して調査、考察を行い、そこでのキーワードとして、共感、一時性、(脱)イデオロギーなどの要素を明らかにした。とりわけ、この共同体の一時性とその継続に伴う問題についても考察した。また、当初計画にはなかったが、現在のイスラームのさまざまな形での前景化にともなう文化的な影響を、ユートピア言説の観点から探るために調査、考察を行った。それによって、イスラーム経済圏およびイスラーム資本などの重要性について、今後、より考察を深める必要性を明らかにするとともに、異なる表出形態のユートピア言説とヨーロッパと共通するユートピア的衝動などについて考察した。

### (5) 総括

<希望の原理>という観点からの二十世紀以降のユートピアの見直しという本研究の主要な観点から研究全体の総括を行い、現在にまでつながるこの時期に、従来とは異なる形ではあるがさまざまなユートピアが登場し、重要な役割を果たしていることを確認するとともに、認識の枠組みの変更可能性を明らかにした。

具体的には、二十世紀をユートピアの死の時代としてとらえるだけでは不十分であることを以下の2点について明らかにした。まず、第一に、従来ではユートピア文学とは考えられていなかった(隣接するジャンル)SF、ファンタジーなどについても、ユートピア文学/言説として検討する必要がある。第二に、ユートピア思想についても、この時代、とりわけ、プロットホの<希望の原理>、ユートピア的衝動という概念から、全体を見直すことにより、より広範なユートピアに関する概念を扱うことが可能になる。

以上のような総括を踏まえ、現在、個別のテキストについて検討を進めつつ、個別の分析間の関係性についても考察を深めているところである。まず、SFにおけるユートピア思想の発展過程と近年の特徴的な要素(とりわけ、グローバリズムが進行する状況との関係において)、次いで、この分析と現実のさまざまな共同体におけるユートピア的衝動の要素との比較/検討を行っているところである。

### まとめ

これまで述べてきたとおり、二十世紀のユートピア言説は、社会主義の衰退に伴う消滅の過程にある存在ととらえられてきた。もはやディストピアとしてすら語られる価値がないとすらみなされていたとも言える。本研究では、二十世紀以降に存在していた、従来のユートピアの伝統に基づきながらも、テキストの形式などを大きく変えたものなどが数多く生み出されており、これらのテキスト群を再評価・再発見するとともに、そこに含まれるさまざまなユートピア的衝動を検討し、それがいかにテキスト中で利用されているかを分析した。また、これらに加えて、<希望の原理>という観点から、近年主流の、現実主義/実践主義的イデオロギーに対抗する言説の可能性をさまざまなテキストにおいて明らかにした。

その結果、(1)二十世紀以降のユートピア思想の存在確認と新たな展開の確認に伴うユートピア思想史の見直し (2)<希望の原理>という観点からの、リアリズム/プラグマティズム優勢の思想的状況の見直し (3)グローバリズムとネオリベラリズムの台頭状況における、左翼思想の見直し作業の必要性の確認とその可能性の提示、という3点において成果があがり、このような研究を

通じて、また、これまでの研究の成果を通じて、ユートピア思想の全体像を通時的観点から再確認できたと考えている。今後は、現在進行中の作業を継続するとともに、より一層、ユートピア言説のアクチュアルな意義について考察を深めたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

川田潤「原子論と初期近代英国演劇」『福島大学人間発達文化学類論集 人文科学部門』第20号、pp.77-90. 査読無、2014年12月

〔学会発表〕(計 3 件)

川田潤「最近の17世紀研究の動向と論文の特徴」十七世紀英文学会東北支部 於東北学院大学 2013年7月20日

川田潤「不可視の力を可視化する — 原子論と初期近代演劇 —」日本英文学会シンポジウム第一部門「初期近代演劇科学的知見 — 円環の断面/断片をスペクタクル化する —」於北海道大学 2014年5月25日

川田潤「十七世紀の原子論とジェンダー/ポリティクス — マーガレット・キャヴェンディッシュの原子論 —」十七世紀英文学会東北支部 於東北学院大学 2014年8月9日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

川田潤(KAWATA, JUN)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：70323186

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：